

潘金蓮論

— 散曲に綴られる想い —

川 島 優 子

はじめに

『水滸伝』第二十四回く第二十六回には、後に梁山泊入りすることとなる豪傑武松が、兄嫁潘金蓮、及び彼女と密通した西門慶を血祭りにあげるまでの話が描かれる。この潘金蓮という女性は、武大という夫がいる身でありながら西門慶と密通し、夫を毒殺する、まさに「悪女」の代名詞とされる人物である。そんな彼女（及び西門慶）を主人公として物語が繰り広げられるのが『金瓶梅』である。『水滸伝』から誕生した悪女潘金蓮は、『金瓶梅』においても同様に、いやより肥大化した悪女的形象を備え持つ女性として描かれている。しかしそんな中、彼女を形作る要素のひとつとして散曲が用いられている点は見逃すことができないだろう。^①

「散曲」とは、元代を中心に行われた歌謡で、日本の端唄や小唄に類似すると言われる。散曲はその形体や発想、表現、効用など、先行する「詞」と本質的にはほとんど変わりがなく、詞の連続或いは亜流としても位置づ

けられるものである。しかし形体の長編化、俗語的表現の多様化など、独自の文学ジャンルを形成するに至った。^② 散文（小説）の中に韻文（詩詞）が挿入されるのは、唐代伝奇などにも多く見られる、伝統的手法である。小説中における詩の役割については、すでに様々な指摘があるが、中でも登場人物の感情を表現する役割を担う詩は極めて多いとされる。^③

『金瓶梅』でも同様に、登場人物の心理を描写するひとつの手段として、散文の中に韻文を取り込むという手法が用いられている。それも、詩や詞のみならず、「俗語」「套数」「襯字」の使用などによって、より細やかな感情の描写を可能にしたとされる「散曲」が多く挿入されているのである。中でも潘金蓮の心情を表す散曲は多く、散曲を取り入れることで潘金蓮の心情が積極的に描写されていることがわかる。

従来、『金瓶梅』に見られる散曲に関しては、主にその素材を中心とした研究はなされているものの、作者が散曲を利用して如何なる潘金蓮像を構築しようとしたか

を探る試みはなされていないようである。そこで本稿では、潘金蓮像に迫るアプローチのひとつとしてこの散曲を取り上げ、潘金蓮の心理描写との関係を中心に考察を加えてみたい。

一 散曲の取り入れられ方

まず、散曲が作中でどのように用いられているかを確認しておきたい。『金瓶梅』における散曲の取り入れられ方は一様ではなく、以下の五つに分けることができる。

① 語り手が挿入するものとして

『金瓶梅』という作品は、同時代の白話小説同様、語り手がある物語を聴衆に語り聞かせる、という話本の体裁を取っている。作中にはしばしばその語り手が、物語に登場する人物の心情、場の状況などを散曲によって語る場面が見られる。例えば「有「山坡羊」為證」（そのありさまを「山坡羊」が以下のようにうたっておりませす）^⑤といったように散曲が挿入されるのである。

② パフォーマンスとして

物語中の登場人物（主に妓女などの唱い手）が宴席などで、別の人物にパフォーマンスとして唱い聴かせるものである。リクエストを受け、それに応じる場合もある。特定の人物の心理を描写しているものは少なく、そのほとんどが「遊び」として用いられている。^⑥この②は作品全体を通して最も多く見られる。

③ 手紙の文句として

「鶯鶯伝」などにも見られるように、意中の相手に想いを伝える際に用いられる伝統的な手法である。『金瓶梅』でも、潘金蓮が西門慶及び陳經濟に想いを伝える場面で用いられている。

④ ダイアローグとして

登場人物同士が台詞の代わりに散曲でやりとりをする、或いは登場人物が別の登場人物に向かって一方的に散曲を唱うものであり、

(a) ……登場人物同士互いに

(b) ……ある登場人物が、別の登場人物に向かって一方的に

に分けられる。戯曲の影響が色濃く窺えるが、^⑦これには、そもそも散曲が諸宮調や戯曲における歌辞部分と全く同じ条件を備えるものであることも関係していよう。

⑤ モノローグとして

登場人物が誰に聞かせるともなく自らの想いを唱うものである。これも戯曲的な手法であることが指摘できる。しかしこちらは、④のそれが、登場人物間における意思の伝達という役割を果しているのに対し、作中には聞き手が存在しない完全なる独白の形式となっており、伝達の手段としては機能していないという大きな特徴を持っている。つまり、これは登場人物の抑えきれなくなった感情、嘘偽りのない本心を吐き出す為だけに発せられたものといえる。その想いは②と④のように物語世界内部

だけで完結するのではなく、かといつて①のように語り手という媒介によって代弁されるのでもなく、想いを発した作中人物からダイレクトに読者に向かつてくるものであると言えよう。^⑦

潘金蓮の心情描写を考察する際、特に重要視すべきは、この強い感情表現の手段として用いられる⑤「モノローグとして」唱われるものである。そこで以下、⑤のスタイルにて唱われる第一回、第八回、第三十八回の散曲を取り上げ、具体的に潘金蓮のどのような心情が表されているのかを見ていくこととする。

二 潘金蓮の散曲

(一) 第一回の散曲

貧しい家に生れ育ち、幼い頃から屋敷を転々とさせられていた潘金蓮は、十八才の頃、奉公先の張旦那に手を付けられる。それを張旦那の夫人に知られた彼女は、その後「三寸丁谷樹皮（ちんちくりんのあばた男）」とあだ名される、蒸し餅売りの武大に嫁がされる羽目になる。美しい彼女が醜い武大に満足できるはずはない。そもそも潘金蓮が武大に嫁がされるという大枠は、『水滸伝』からそのまま借り受けたものであった。その『水滸伝』において、潘金蓮の不満はごく簡単にしか記されていない^⑧。

原来這婦人見武大身材短矮、人物猥獐、不会風流。

女が見ますに、武大はチビで人間も野暮、男女の粹はまるでわかりません。【第二十四回】
一方『金瓶梅』では、潘金蓮の武大に対する不満が詳しく記される。

原来金蓮自從嫁武大、見他一味老實、人物猥獐、甚是憎嫌、常與他合氣。報怨大戸、「普天世界、斷生了男子、何故將奴嫁與這樣個貨。每日牽着不走、打着倒腿的、只是一味味酒。着緊處、都是錐扎也不動。奴端的那世裡悔氣、却嫁了他。是好苦也。」

金蓮は武大に嫁いでからというもの、武大がどこまでも馬鹿正直、野卑でうだつが上がらないものから、ひどく嫌い、武大に腹を立ててばかりいました。そして大戸を恨みます。「この世の中、男の根が絶えたわけじゃあるまいし、何であたしをこんな奴のところにお嫁にやっただらう。毎日毎日牽いても進まず打てば後ずさり、のんびんだらりと酒ばかり飲んで。肝心な時だって、錐で刺しても動きやしない。何の因果でこいつのところにお嫁ぐことになったんだか。ほんとに辛いわ。」【第一回】

このように、『金瓶梅』における潘金蓮の不満は『水滸伝』を下敷にしながらもより詳しく記されるのだが、『金瓶梅』の方は単なる描写の増加だけでは終わらない。続けて、『水滸伝』には見られない潘金蓮の嘆きが綴られる。

(潘金蓮) 常無人處彈個〔山坡羊〕爲証、

想當初、姻緣錯配、奴把他當男兒漢看覷。不是奴自己誇獎、他烏鴉怎配鸞鳳對。奴真金子埋在土里、他是塊高號銅、怎與俺金色比。他本是塊頑石、有甚福抱着我羊脂玉躉。好似糞土上長出靈芝、奈何、隨他怎樣、倒底奴心不美。聽知、奴是塊金磚、怎比泥土基。

潘金蓮はいつも人のいないところで「山坡羊」を弾いておりました。

思い返すに最初から、間違いだった縁結び、あんなやつが亭主とは。自慢するんじゃないけれど、あんな烏鴉からすが何だつて、鸞鳳ほうおうを女房に持てるのか。あたしや土に埋もれた黄金きん、どうしてあんな赤金あかがねと、一緒にされなきゃならないの。あいつはもともただの石、それがいったい何だつて、このやわ肌を抱けるのか。まるで泥土に咲く靈芝、ああ、たとえあいつがどんなでも、あたしの心は晴れやしない。ねえねえ聴いてちょうだいな、あたしや金の塊よ、どうしてあんな土くれと、一緒にされなきゃならないの。【第一回】

武大のような男に嫁がされた美女潘金蓮が、「常無人處（いつも人のいないところ）で」、独り散曲に載せて嘆きの心情を吐露する姿が描き出されている。その後、潘金蓮は西門慶との密通、武大の毒殺、という悪事に手を染めることとなるのであるが、彼女が何故そうなるに至ったのか、『水滸伝』では決して語られることのなかつ

た潘金蓮なりの苦惱、想いが、散曲の利用によって、彼女自身の言葉として語られるのである。

(二) 第八回の散曲

さて、こうした不満の中、西門慶と出逢った潘金蓮は、ほどなく彼と恋仲になり、隣に住む仲介役の王婆の計画に従って武大毒殺に踏み切る。武大の供養もそっちのけに、仲睦まじい日々を送っていた西門慶と潘金蓮であったが、そんな中、西門慶に、第三夫人となる孟玉楼との結婚話が持ち上がる。その結果、西門慶の足は潘金蓮の元からすっかり遠のいてしまうこととなる。西門慶を信じ、待ち続ける潘金蓮であったが、彼はいつこうに姿を見せない。この場面において、潘金蓮の想いは様々な趣向を凝らして描写される。西門慶を待ちながら恋占いをやってみる潘金蓮、その心情がまず語り手によって代弁される(①)。その後、通りすがりの玳安(西門家の下男)を呼び止めた潘金蓮は、自らの想いをうたで玳安に伝える(④b)。玳安に手紙を言付けてもらうことにした潘金蓮は、西門慶への想いを手紙に綴る(③)。しかし、それでも西門慶はやってこない。

那婦人毎日長等短等、如石沉大海一般、那裡得個西門慶影兒來。看看七月將盡、到了他生辰。這婦人挨一日似三秋、盼一夜如半夏、等了一日、杳無音信、盼了多時、寂無形影。不覺銀牙暗咬、星眼流淚。……原來婦人在房中、香薰鴛被、欸剔銀灯、睡不着、

短歎長吁、翻來覆去。正是「得多少琵琶夜久殷勤弄、寂寞空房不忍彈。」于是獨自彈着琵琶、唱一個「綿搭絮」爲証、

女は毎日、今日か明日かと待ちこがれておりましたが、石の大海に沈んだが如く、西門慶の姿は見えません。みるみるうちに七月も残すところわずかとなり、西門慶の誕生日がやってきました。女は一日千秋、一夜半夏の思いで堪え忍びますが、いくら待っても音沙汰はなく、どれだけ俟っても寂として影も形も見えません。覚えずひそかに齒を食いしぼり、瞳からは涙があふれます。……女は部屋の中で夫婦布団に香を焚きしめ、ねんごろに灯火をかき立てますが、寝付くこともできず、しきりにため息をついては、寝返りを打つばかり。まさに「夜長になぐさむ琵琶あれど、寂しき閨にて弾くに忍びず」というところ。そこでひとり琵琶を弾きながら、「綿搭絮」を唱います。

待てど暮らせど現れない西門慶に恋い焦がれる潘金蓮は、琵琶を弾きながら切なく激しい胸の内を吐露する。

當初奴愛你風流、共你剪髮燃香、雨態雲踪兩意投。
背親夫和你情偷、怕甚麼傍人講論、覆水難收。你
若負了奴真情、正是緣木求魚空自守。
又、

誰想你另有了裙釵、氣的奴似醉如痴、斜傍定幃屏
故意兒猜。不明白、怎生丟開。傳書寄柬、你又不

來。你若負了奴的恩情、人不爲仇天降災。

又、

奴家又不曾愛你錢財、只愛你可意的冤家、知重知輕性兒乖。奴本是朵好花兒、園內初開。蝴蝶餐破、再也來。我和你那樣的恩情、前世裡前緣今世裡該。

又、

心中猶豫展轉成憂、常言婦女痴心、惟有情人意不周。是我迎頭、和你把情偷、鮮花付與、怎肯干休。你如今另有知心、海神廟裡和你把狀投。^⑩

原來婦人一夜翻來覆去、不曾睡着。【第八回】

粹なあんたを見初めた頃にや、あんたの為に髪を剪り、灸まで据えて、二人して、息もぴったり濡れたじゃないの。夫に背を向けあんたに逢って、他人の噂もなんのその、もうあの頃には戻れない。あんたあたしを捨てるのかい、こんなあたしを捨てるのかい、何を言ってもあんたは帰らず、ひとりむなく閨で待つ。

他に女がいたなんて。取り乱してはふらふらと、屏風にもたれて考える。わかりやしないわ、どうすれば、あんたを忘れられるのか。いくら便りを送っても、あんたの姿は見えやせぬ。あたしの気持ちに背いたら、きっと天罰下るわよ。

愛おしいのは金じゃない、あんた自身が好きなのさ、賢いあんたが好きなのさ。あたしやもともと

庭に咲く、きれいなきれいな一輪花。咲いた頃には蝶々に、さんざん食われてちぎられて、今じゃすっかり見向きもされぬ。あたしとあんたのあの情け、前世からの因縁で、逃れることなどできやしない。

あれこれ思いをめぐらせて、くよくよ嘆いて寝返りばかり。「女は一途」というけれど、惚れた男は不誠実。面と向って情を交わし、切り花渡さによ引き下がれない。他に女がきただなんて、海神さまに訴えてやる。

女は一晚中寝返りをうつばかりで、一睡もしませんでした。

潘金蓮は「獨自彈着琵琶（ひとり琵琶を弾きながら）」、苦しい恋心を切々と唱い上げるのである。しかしここでは、「你若負了奴的恩情、人不爲仇天降災（あたしの気持ちに背いたら、きつと天罰下るわよ）」、「前世裡前縁今世裡該（前世からの因縁で、逃れることなどできやしない）」、「你如今另有知心、海神廟裡和你把狀投（他に女ができただなんて、海神さまに訴えてやる）」などというやや強がった歌詞が採用されており、苦しいながらもまだ西門慶の再来を信じている潘金蓮の心情が描き出されている。

実際、西門慶は再び彼女の元へ戻ってくる。やつこのことで王婆に連れられてこられた西門慶に対し、潘金蓮は帽子をつかみ取って地べたに叩きつけ、「那怕負心強

人陰寒死了、奴也不疼他。（こんな薄情な強盗は、大風邪をひいて死んでしまったって、痛くも痒くもないわ。）と罵り、西門慶が持っていた孟玉楼の簪を巻き上げたり、扇を別の女にもらったものだど誤解してへし折ったりと、ひとしきり大騒ぎをする。先ほどの歌詞と併せてみても、潘金蓮のこの強がった態度は、このような態度を取ったところで西門慶は逃げていかないという、西門慶との関係に対する彼女の自信を描写していると言えよう。西門慶になおざりにされ、涙に暮れる日々を送った潘金蓮ではあったが、今回の一件はあくまで西門慶の浮気とも言うべき一時的なものであり、自分に対する愛情が根底から覆った訳ではない、との自信である。責められる西門慶の方も、「我若負了你情意、生碗來大疔瘡、害三五年黃病、匾担大蛆蟻口袋（もしもお前の気持ちに背くようなことがあったら、碗ほどもある瘡がで、四五年間黄痘を患い、蛆虫の入った大きな袋を担ぐことになるだろうよ）」としらを切り通すなど、何とか潘金蓮をなだめようとする様子が描かれている。

(三) 第三十八回の散曲

その後ようやく西門慶の第五夫人におさまった潘金蓮は、相変わらず多情な西門慶に幾度となく悩まされつつも、西門慶に相手の女性との一部始終を全て報告させることで自分が優位に立とうとするなど、強気な姿勢を保っていた。しかし第三十回、李瓶児が長男の官哥を出産

すると、西門慶の寵愛はすっかり李瓶児母子へと移ってしまう。今夜こそは、という期待が裏切られる日々が続いていた潘金蓮は、第三十八回、その夜も外出先から帰ってくる西門慶をひとり待ちわびていた。

単表潘金蓮、見西門慶許多時不進他房里來、每日翡翠衾寒、芙蓉帳冷。那一日把角門兒開着、在房內銀燈高點、靠定幃屏、彈弄琵琶。等到二三更、便使春梅瞧數次、不見動靜。正是、銀箏夜久慙慙弄、寂寞空房不忍彈。取過琵琶、橫在膝上、低低彈了個「二犯江兒水」、以遣其悶。在床上和衣兒又睡不着、不免、

悶把幃屏來靠、和衣強睡倒。

さて潘金蓮ですが、西門慶が長らく自分の部屋へやつてきませんので、翡翠の衾は寒々と、芙蓉の帳は冷え冷えとしておりました。その日はくぐり戸を開けたまま、部屋の中でもしびを高くつけ、屏風にもたれかかり、琵琶をかき鳴らします。一、三更（夜の九時〜一時頃）になると、幾度か春梅の様子を見に行かせますが、何の気配もありません。まさに、「夜長になぐさむ銀箏あれど、寂しき閨にて弾くに忍びず」というところ。そこで潘金蓮は琵琶を手元に寄せると、膝の上に横たえ、憂さ晴らしに「二犯江兒水」を低く奏でます。服を着たままベッドに横たわりますが、寝付けません。

くよくよ屏風によりかかり、帯も解かずに臥して

はみたが。

自分のところへはすっかり足を運ばなくなった西門慶を待ち続けながら、潘金蓮は琵琶をかき鳴らす。

猛聽得房簷上鉄馬兒一片聲响。只道西門慶來到、敲的門環兒响、連忙使春梅去瞧。他回頭「道」、「娘錯了、是外邊風起落雪了。」婦人于是彈唱道、

聽風聲嘹唳、雪洒窓寮、任冰花片片飄。

一回兒燈昏香盡。心里欲待去剔續、見西門慶不來、又意兒懶的動旦了。唱道、

懶把寶燈挑、慵將香篆燒。（只是捱一日似三秋、

盼一夜如半夏。）捱過今宵、怕到明朝。細尋思、

這煩惱何日是了。（暗想負心賊當初說的話兒、心

中由不的我傷情兒。）（合）「想起來、今夜裡心

兒內焦、悞了我青春年少。（誰想你弄的我三不歸、

四捕「脯」兒着他「地」。）」你撇的人、有上稍來

沒下稍。

突然、軒の風鈴が鳴り響きました。西門慶がやって来て門を敲いた音だと思つた潘金蓮は、急いで春梅を見に行かせます。しかし春梅はふり向いて「奥さま、違いますよ。外で風が吹いて雪が落ちただけですわ。」そこで女は琵琶を弾きながら唱います。

聞こえてくるのは風の音ばかり。雪は小窓に降りしきり、ちらちら舞い散る氷の花。

しばらくすると灯火も暗くなり、お香も消えてしまいます。付け足しに行こうかとも思いましたが、西

門慶が来ないと見ると、体を動かすのもおっくうになつてしまいました。

消える灯りもそのままに、香を足すのも何だかだるい。(一日三秋の想いで堪え忍び、一夜半夏の想いで待ち続けるばかり。) 今宵過ぎればまた日が昇る。よくよく思い返してみるに、一体いつからこの悩み。(薄情者があの頃言った言葉を思い出すと、思わず胸がきりきり痛むわ。)(合唱) 想えば心はじりじり痛む。この美しき青春を、あたしは踏み外したのやら。(あんたのおかげで、すっかり寄る辺を失つてしまうことになるなんて。) 捨てられちまったこのあたし、この先どうすりやいのやら。

潘金蓮在那邊屋裡、冷清清獨自一個兒坐在床上、懷抱着琵琶。桌上燈昏燭暗。待要睡了、又恐怕西門慶一時來。待要不睡、又是那盹困、又是寒冷。不免除去冠兒、亂挽烏雲、把帳兒放下半邊來、擁衾而坐。……又唱道、

懊恨薄情輕棄、離愁閒自惱。

又喚春梅過來、「你去外邊再瞧瞧、你爹來了沒有。快來回我話。」那春梅走去、良久、回來說道、「娘還認爹沒來哩。爹來家不耐煩了、在六娘房里吃酒的不是。」這婦人不聽罷了、聽了如同心上戳上幾把刀子一般、罵了幾句「負心賊」、由不得撲簌簌眼中流下淚來。一逕把那琵琶兒放得高高的、口中又唱道、

論殺人好怒、情理難饒。負心的、天鑒表。(好教我題起來、又是那疼他、又是那恨他。) 心痒痛難掃「揉」、愁懷悶自焦。(叫了聲賊狠心的冤家、我比他何如。塩也是這般塩、醋也是這般醋。磚兒能厚、瓦兒能薄。你一旦棄舊憐新。) 讓了甜桃、去尋酸棗。(不合今日教你哄了。) 奴將你這定盤星兒錯認了。(合) 想起來、心兒里焦、悞了我青春年少。你撇的人、有上稍來沒下稍。……

常記的當初相聚、痴心兒望到老。(誰想今日他把心變了、把奴來一旦輕拋不理、正如那日。) 被雲遮楚岫、水滄籃橋、打拆開鸞鳳走「交」。(到如今、當面對語、心隔千山。隔着一堵牆、咫尺不得相見。) 心遠路非遙、(意散了、如塩落水、如水流沙相似了。) 情疎魚雁杳。(空教我有情難控訴。) 地厚天高、(空教我無夢到陽臺。) 夢斷魂勞、俏冤家這其間心變了。(合) 想起來、心兒裡焦、悞了我青春年少。你撇的人、有上稍來無下稍。

潘金蓮は自分の部屋でひっそりと独りベットに坐り、琵琶を抱いておりました。テーブルの上の灯りは暗くなっています。眠つてしまおうかとも思いましたが、西門慶が急にやってくるかもしれないと思ひ、寝ないでいようかとも思いましたが、眠くもあり、寒くもあります。仕方なくかぶり物を取つて、黒髪を適当に束ねると、帳を下の方にやり、衾を抱えて坐ります。……そしてまた唱います。

薄情者を恨んでみても、別れの悲しみ悶々と。

そこでまたもや春梅を呼び寄せます。「おまえもう一度外へ行つて、旦那さまが帰つて来たかどうか見ておいで。急いで報告しに戻るんだよ。」見に行つた春梅、しばらくすると戻つてきてこう言います。

「奥さまはまだ旦那さまがお戻りになつていないとも思つてらつしやるんですか。旦那さまはお戻りになるとすぐに、六奥さまのお部屋で飲んでいらつしやるじゃありませんか。」女は聞かなければよかつたものを、聞いて心はいくつもの刃物が突き刺さつたかのようになり、「裏切り者」と罵つては思わず涙をぼろぼろと流します。そしてひたすら琵琶を高々とかき鳴らし、再び唱います。

人殺しなら許せても、情理にもとるは許されぬ。

この裏切りの一切も、お天道様にはお見通し。(言わせてもらえば、あいつが愛おしくもあり、恨めしくもある。)心がずきずきむずむずしても、どうすることもできやしない。気持ちにはふさいで悶々と、ひとりむしゃくしゃするばかり。(叫んでみる。残酷な憎い人、あたしがあの人と比べてどうだつていうの。塩だつて酢だつて変わりやしないじゃない。磚は厚いのに瓦は薄いとでもいうのかい。旧いのを捨てたかと思つたらもう新しいのを可愛がるのかい。)甘い桃はうっちゃつて、酸っぱい棗の方へ行く。(今日はあんに騙されな

いわ。)あたしの見る目がなかつたの。(合唱)

想えば心はじりじり痛む。この美しき青春を、あたしは踏み外したのやら。捨てられちまつたこのあたし、この先どうすりやいいのやら。……

忘れもしないわあの頃は、共白髪までと願つたわ。(あいつが心変わりをして、あたしを突然捨て去るなんて思つてもみなかった。まるであの時みたい。)楚山は雲に遮られ、藍橋すっかり水浸し、鸞と鳳とは引き裂かれ、顔も見えなきや会えもせず。(今じゃ向かい合つて話していても、心は遠い山の彼方。堀ひとつ隔てていだけ、すぐそこにいるのに会えないのね。)近くににいるのに心は遠く、(気持ちはずつかりバラバラで、水に落ちた塩みたい、砂に落ちた水みたい。)気持ちは離れて便りもない。(未練があるから訴えることもできないわ。)大地は厚く天高く、(夢の中でも陽台には行けない。)夢は途切れて気は疲れ果て、愛しいあんたは心変わり。(合唱)想えば心はじりじり痛む。この美しき青春を、あたしは踏み外したのやら。捨てられちまつたこのあたし、この先どうすりやいいのやら。

ここでも潘金蓮は、「冷清清獨自一個兒坐在床上、懷抱着琵琶(ひっそりと独りつきりでベットに坐り、琵琶を抱いて)唱うのである。その頃李瓶児の部屋で飲んでいた西門慶は、何やら琵琶の音がしているのに気付き、

李瓶児とふたりでのこのこと潘金蓮の部屋へやってくる。しかし潘金蓮は取り合わない。

金蓮坐在床紋絲兒不動、把臉兒沉着、半日說道「那沒時運的人兒、丟在這冷屋裡、隨我自生兒由活的、又來揪採我怎的。沒的空費了你這個心、留着別處使。」金蓮はベッドに座ったまま微動だにせず、表情をくもらせておりましたが、しばらくするとこう言います。「運に見放された人間が、この寒々とした部屋にほったらかしにされてるんですもの、何をしようかと勝手でしょう。あたしなんかを構いに来てどうするっていうのよ。こんなところで無駄に気を遣ったりせずに、他のところで遣えばいいじゃない。」春梅に鏡を持ってこさせた潘金蓮は、自分のやつれ切った顔を見て、涙を流す。

春梅把鏡子眞個遞在婦人手裡。燈下觀看。……
羞把菱花來照、蛾眉懶去掃。暗消磨了精神、折損了丰標、瘦伶仃不甚好。

……說道「着」、我「順」着香腮拋下珠淚來「我的苦惱、誰人知道。眼淚打肚里流罷了。」

悶下「悶」無聊、攘攘勞勞、淚珠兒到今滴盡了。
(合) 想起來、心裡亂焦、悞了我青春年少。撇的人來、有上稍來落下稍。

春梅は本当に鏡を女に渡します。灯りの下で見ると……

菱花かがみに映すも恥ずかしく、眉をは刷く気もおこりや

しない。人知れぬ間に心を砕き、美貌もすっかり損って、瘦けて今では見る影もない。

……話しながら、涙のしずくが頬を伝います。「あたしの苦しみが、一体誰にわかるっていうのよ。涙はもう胸の中から流れ尽きてしまったわ。」

心はくさくさ、気持ちは乱れて、涙の玉も尽き果てた。(合唱) 想えば心はじりじり痛む。この美しき青春を、あたしは踏み外したのやら。捨てられちまったこのあたし、この先どうすりやいいのやら。

ここに描かれるのは、西門慶の再来を信じて待ち続ける潘金蓮ではない。今や西門慶の愛は完全に李瓶児母子に移り、自分を愛してくれていた頃とはもうすっかり変わってしまったのだ。ここには男の心変わりをはっきりと自覚し、もうどうにもならないことを認め、出逢ったことさえ悔いる、そんな絶望ともあきらめともいふべき潘金蓮の心境が表現されている。実際、ここでの潘金蓮は、第八回に見られたように、西門慶に食ってかかり、裏切りを責め立てたりはしない。ただひとり涙を流すばかりである。

以上、潘金蓮の唱う散曲を時間軸に沿って見てきたが、そこから彼女の「心」、及び状況の変化に伴う「心の動き」を読みとることができた。他の人物の散曲が、怒りや死別の悲しみなど、ある一時的な感情を突発的に描写

するものであるのに対し、潘金蓮の散曲は、いずれも恋愛に関する自らの継続的な想いがピークに達した時々唱われている。しかも潘金蓮の唱う散曲を通して、(一)

「自らの境遇に対する不満、孤独感」↓(二)「西門慶になおざりにされた嘆き(しかしまだ西門慶の愛情を信じており、強気な姿勢)」↓(三)「西門慶の愛情が李瓶児母子へと完全に移行してしまったことに対する自覚、絶望」という、彼女の「心の動き」までも読みとることができるようになっているのである。例えば、第三十八回の散曲には、うたの間に潘金蓮の台詞が挿入されているが、その中にある、「正如那日(まるであの時みたい)」という台詞の「那日(あの時)」とは、第八回で彼女がひとりぼっちにされた時のことを指しているものと考えられる。つまりこれらの散曲は、決してその場限りのものとして適当に配置された関連性の無いものなどではなく、状況の変化に伴う彼女の「心の動き」を表現するものとして、有機的に結びついていると考えられるのだ。

三 「怨婦」から「妬婦」へ

さて、散曲によって、状況の変化とともに揺れ動く潘金蓮の想いが綴られていたわけだが、第三十八回、西門慶の寵愛が李瓶児へと移ってしまったことを悟り、そのことに対する絶望の想いを吐露した彼女は、次に如何な

るうたで如何なる想いを表出するのだろうか。

実はこれ以降、潘金蓮は唱わなくなってしまう。つまり散曲を用いて潘金蓮の心が表現されることはなくなってしまうのである。

その頃から彼女は西門慶を取り戻す為の直接的な行動をエスカレートさせるようになっていく。西門慶を奪い取った李瓶児母子に対し、自分の女中である秋菊を虐待することで間接的に李瓶児を当てこすったり(第四十一回、第五十八回)、正妻呉月娘と李瓶児とを仲違いさせようとしたり(第五十一回)、官哥をおびえさせたり(第五十二回)と、執拗な嫌がらせを繰り返す潘金蓮は、ついには李瓶児母子を死へと追いやってしまう。第三十八回以降の潘金蓮は、『金瓶梅』の冒頭部にも挙げられる呂后を彷彿とさせる女性として描かれるようになるのである。その、相手の女性を死へと追い込むほどの恐ろしい形象は、「妬記」などの嫉妬物語にも登場する典型的な「妬婦」像に他ならない。

林香奈氏は、この「怨」と「妬」の関係について、以下のように指摘される。¹⁰⁾

この「妬」と類似したものに「怨」がある。『芸文類聚』にも「怨」の一項が設けられているが、そこには男の心変わりに対する女性の嘆きを詠んだものが多く収められている。これらの「怨」と「妬」とは、男の寵愛を失うという点において共通しているが、その現れ方は全く異なる。実際に「妬」に関する

る記述を見てみると、そのほとんどが、……嫉妬深く過激な女性達で、いずれも鬱積した感情が攻撃的な形で外側に現れ出ている。一方の「怨」は、王昭君の故事にせよ、班婕妤や陳皇后に題材をとった怨みの詩賦にせよ、いずれも相手に対する思いが自らの胸の内にとどめられている。両者を比較する限り、『芸文類聚』の「妬」は内的感情が外的な行動に移されたものが、集められていると言える。また、「怨」の項には多く詩賦が収められているが、「妬」の項には、「妬婦」にまつわる故事が豊富に収められている一方で、詩賦は魏の曹植の「妬」詩と梁の張纘の「妬婦の賦」しか採られていない。このことから、「怨」は人間のより内面的なものを、「妬」は行動として現れ出たものをここでは指していることがわかる。

この「怨」と「妬」は、一方は閨怨詩の伝統の中で女性美の象徴として賞賛され、一方は嫉妬故事の中で悪女の典型として非難されるという、独自の道を歩む。しかしそもそも「怨」と「妬」というのは、いずれも人間のひとつの感情が表現されたものであり、それをどのような視点で描くかという違いでしかなかった。内側から描こうとすれば韻文によって記される「怨」となり、外側から描こうとすれば客観的な散文によって記される「妬」となる、表裏一体のものなのだ。

中国文学には、前漢の班婕妤の「怨歌行」に始まり、

六朝の宮体詩、唐の閨怨詩、そして戯曲、散曲へと脈々とつたい続けられてきた、「閨怨」の伝統があった。松浦友久氏が「唐代詩人の抱く女性観の中核が、怨の心情を抱いて男性を待つ女性像を、女性の美、もしくは魅力の典型と考えるものだった」と指摘するように、¹²⁾「怨の心情を抱いて男性を待つ女性」は、好んで取り上げられ続けた題材であった。潘金蓮の唱う散曲がこの「閨怨」の流れの中にあることは一目瞭然であろう。つまり、第三十八回までの彼女には伝統的な「怨婦」のイメージが付与されていたと考えられるのである。

しかし第三十八回、もはや待っているだけではどうにもならない自らの境遇を悟り、絶望の想いを唱った潘金蓮は、その後スイツチが切り替わったかのように「妬婦」として描かれるようになる。彼女は終始「怨婦」として描かれるのではなく、最初から理解不能な「妬婦」だったわけでもない。「妬婦」潘金蓮は「怨婦」潘金蓮の延長線上に位置していたのである。彼女の激しい嫉妬は、切ない想いが外に牙を剥いたものだったのだ。

こうして、第三十八回の絶望のうたを最後に、「怨婦」としてではなく、完全なる「妬婦」として描かれるようになる彼女の心の内は、もはや散曲という直接的な表現を用いて描写されることはなくなる。しかし、彼女の心は決して描かれなくなってしまう訳ではない。潘金蓮は李瓶児母子への嫉妬を激化させる一方で、西門慶に対しては、彼を自分のところにつなぎ止める為に如何なる性

的行為をも厭わなくなるなど、手段を選ばないようになる。彼女の歪みゆく心は、性の描写によって、間接的に描き続けられるのである。^④ そんな彼女の歪んだ性の描写は、西門慶の死と同時に終止符を打つ。西門慶の死後、娘婿陳經濟との逢瀬を楽しむ潘金蓮の性は、直前までの切羽詰まった、歪みきったものではなく、西門慶と出逢った頃のような歡びに満ちたものへと戻るのである。一方で、この西門慶の死を境に、彼女は再び恋の歌を唱うようになる。「怨」と「妬」と「淫」は決して切り離せるものではなく、複雑に絡み合いながら潘金蓮という女性像を作り上げていたのだ。

おわりに

本稿では、潘金蓮の唱う散曲に考察を加え、それが彼女の心、及び心の動きを表現するために、有機的な関わり合いを持って用いられていることを指摘した。更に、それら散曲によって表される潘金蓮の心情が、伝統的女性美の象徴たる「怨婦」のそれであること、しかしその「怨」なる想いはやがて「妬」なる行為に変わり、その歪みゆく心は、散曲ではなく性描写によって書き継がれていくことを述べた。

潘金蓮は『水滸伝』から借り受けた稀代の「悪女」として設定されている。西門慶と密通して夫を毒殺、西門家に嫁いだ後も様々なめ事を起こし、恋敵李瓶児を徹

底的にたたきつぶすなど、その悪女ぶりは『水滸伝』よりも過激化している。しかしそんな彼女が、一方で自らの苦しい胸の内を散曲にて独白するのである。彼女が働く悪事と、彼女の想いとは、「妬婦」は「妬婦」、「怨婦」は「怨婦」と固定化される嫌いがあつた従来の女性描写からすると、一見相容れないものがある。それは、孟昭連氏が『金瓶梅詩詞解析』（吉林文史出版社、一九九一）の中で、第三十八回の潘金蓮の散曲に対し、

这是潘金莲吗？这就是那个勾奸夫害本夫的潘金莲吗？这就是那个为了满足欲望而不顾一切的潘金莲吗？真是难以相信。这究竟反映了潘金莲性格的复杂、还是反映了她的性格的分裂？

これが潘金蓮なのか。これが姦夫と通じ夫を殺したあの潘金蓮なのか。これが欲望を満たす為には一切を顧みないあの潘金蓮なのか。実に信じがたい。これは潘金蓮の性格が複雑であることを反映しているのか、或いは彼女の性格が分裂していることを反映しているのか。

とのコメントを附されているところからも見てとれよう。しかし、悪女潘金蓮が伝統的な「怨」なるうたを唱うことは、決して彼女の「性格が分裂」している為のものなどではない。彼女の働く悪事は、金目当てでも権力目当てでもない、いずれも恋愛という人間の持つ普遍的な感情の果てに繰り広げられる悪事であることを、そしてそこに恋に身を焦がす想いが内包されていることを、

彼女の唱う散曲は読者に訴えかけているのである。そこに描かれるのは、単に「怨」なる想いを抱いて男を待つだけでもなく、単に衝動的に「妬」に走るだけでもない、恋に身を焦がすが故に悪事の数々に手を染めてしまうこととなる、重層的でリアルな女性像に他ならないのである。

『金瓶梅』は本稿で論じたような伝統的な手法（散曲を用いての直接的心理描写）、及び前稿で論じたような斬新ともいえる手法（性描写を用いての間接的心理描写）を駆使しつつ、様々な角度から、決して表面的には計りきれない人間の裏側までも描き出そうとした作品であると言えよう。それも潘金蓮という、『水滸伝』から誕生した既存の悪女の裏側を、である。この、従来誰も問おうとしなかった悪女の心理に注目したところに、『金瓶梅』のより深い人間洞察の目が感じられるのである。

(注)

- ① 『金瓶梅』に当時流行していた数多くの散曲が取り入れられているとの指摘は、馮沅君「《金瓶梅詞話》中の文学資料」(《古劇説匯》上海商務印書館、一九四七・《金瓶梅資料匯録》黄山書社一九八六)、P. D. Hanan [Sources of the Chin Ping Mei] ([Asia Major, N. S.] vol. X Part I、一九六〇) (荒木猛訳「金瓶梅の素材」(長崎大学教養部紀要(人文科学編)) 35—1、一九九四)、荒木猛「『金瓶梅』中の散曲について」(国

語と教育」(長崎大学国語国文学会) 21、一九九六)等によってなされるところである。

- ② 田中謙二『中国詩文選22 楽府散曲』(筑摩書房、一九八三)参照。

- ③ 内山知也「唐代小説に含まれる詩の機能」(新潟大学高田分校紀要) 2、一九五八)、近藤春雄「唐代小説と詩」(東洋文化(8)) 2—35、一九六二・『唐代小説の研究』笠間書院、一九七八)等。

- ④ 田中氏前掲書(注②)参照。

- ⑤ このように、ストーリーの展開や登場人物の心情等とは無関係に、単に「遊び」として取り入れられている散曲について、荒木氏は前掲論文(注①)の中で、「……ほとんど前後の筋や、登場人物の心情とは関係がなく、また、作者も、これらの曲に何ら意味もこめてないようである。恐らく、これは金瓶梅に描かれたと考えられる明嘉靖年間、廓で実際にこの種の散曲がよく唱われていたことの忠実な再現であろう」とする。筆者も、これら「遊び」の散曲を作者がわざわざ作中に描きこんだのは、自らの散曲の知識をアピールする為か、或いは作品にBGMとも言うべき彩りを加える為か、いずれにせよ、ストーリー展開とはあまり関係のないような日常生活の細部までも描き出すという姿勢の一環として当時の流行り歌を取り込んだだけのことであり、その大多数はストーリー展開に機能させることを意図したものではないと考える。
- ⑥ Hanan氏前掲論文(注①)は、「対話が詞の形で表されていることの唯一確実なる比較は、戯曲との比較である。事実『金

瓶梅』の作者はこの場合戯曲の技巧を真似たかのようである」とし、日下翠「『金瓶梅』における戯曲的表現」(九州中国学会報) 35、一九九七)も、『金瓶梅』における「小説とは異質の『戯曲的表現』ともいべきもの」として、「台詞が唱になる」という点を指摘する。

⑦ 実際恋愛劇においても、登場人物が嘘偽りのない強い感情を吐露する時、それが他の登場人物には聞こえない設定になっているという。桜木陽子「関漢卿の恋愛劇における(もの思い)の位置」(『饕餮』9、一九九九)、日下翠前掲論文(注⑥)等参照。

⑧ 以下、『水滸伝』の引用文は『容与堂本水滸伝』(上海古籍出版社、一九八八)に拠る。また、『金瓶梅』の引用文は『金瓶梅詞話(影印)』(大安、一九六三)に拠り、白維国・卜鍵校注『金瓶梅詞話』(岳麓書社、一九九五)を参照して、誤字と思われるものは「」で訂正し、脱字と思われるものは「」で補った。

⑨ Hanan氏前掲論文(注①)にも「……一回では金蓮が一人になった時唱う歌(「想当初、姻缘錯配奴」)がある。この歌により、彼女の絶望的孤独感が述べられている」との指摘がある。

⑩ 「海神廟裡和你把状投(海神さまに訴えてやる)」の句は、『醉翁談録』巻二にも収められる「王魁負心」故事を踏まえている。恋仲にあった書生の王魁と妓女の桂英は、海神廟で結婚を誓い合う。しかし後科挙に合格した王魁は別の女性と結婚、裏切りを知った桂英は海神廟にて自害し、亡霊となつ

て王魁を苦しめる。

⑪ 林香奈「「妬婦」考」(『言語文化論叢』5、二〇〇一)。

⑫ 松浦友久「唐詩にあらわれた女性像と女性観」(『中国文学の女性像』汲古書院、一九八二)

⑬ 実際彼女が唱う第八回、第三十八回の散曲は、明の嘉靖年間に成立した『雍熙樂府』巻十五に収録される「思情」、及び「題情」という、「閨怨」を想起させるタイトルのつけられた散曲とほぼ同じ内容を持つものであり、既存の「怨歌」だったと考えられる。

⑭ 拙稿「潘金蓮論―歪みゆく性に見る内なる叫び―」(『中国中世文学研究』45、46合併号、二〇〇四)。